

# 被服の縫製指導に関する研究

## — なみ縫い指導にかかわる基礎調査 —

三 田 利 子

Toshiko Mita

### I. は じ め に

短期大学の家政科における被服学は、食物学と共に家庭生活に密着した領域であるだけに、その教育は重要である。本学家政科家政専攻では「手作りの明日を創ろう」を目標におき、特に家庭生活に直接関係ある教科目の技能に力を入れ、将来を背負って立つ主婦の養成に努めている。ちなみに、生命保険文化センターが最近行った「女性の生活の現在および将来」により妻の就労を学歴別にみると、4年制大学卒業の妻は常勤の割合が高く、短期大学卒業の妻は専業主婦の割合が高いことが報告されている。<sup>1)</sup>ただ短期大学卒業生の出身学科が分析されていないため、家政科卒業生の動向とみなしてよいかどうか<sup>2)</sup>については問題があるが、全国的に家政科が多いことからこの調査対象者も家政科出身者が多いものと推測される。これまでに本学家政科出身者の実態は未調査で、いずれ稿を改めて調査する必要があるが、おそらくさきの調査結果に類した傾向がみられるものと思われる。そこで、家政科における被服学のあり方を考えるにあたっては、被服学関連諸学も含めて総合的に検討の必要があることはいうまでもない。しかしここでは、既に記した本専攻の目標となっている「手作り」を重視し、縫製能力向上の一助とするため、「縫い」の原点ともいべき手縫いによるなみ縫いに関する基礎調査を試みたので報告する。

### II. 調 査 内 容 と 調 査 方 法

#### 1. 調査対象

本学家政科家政専攻第1学年学生98人

#### 2. 調査内容

- (1) 家政科家政専攻志望状況
- (2) 被服の既習教材とその利用状況
- (3) 手縫いとミシン縫いに対する学生の好み
- (4) 「なみ縫い」技能の習得状況と理解度
- (5) 「なみ縫い」技能の学生評価と教師評価

#### 3. 調査方法

調査内容(1)～(5)のうち(5)学生評価まではアンケート調査法による。(5)の教師評価は以下の方法による。

被験者1クラス(29人)に試料布(諸元は表1のとおり)を与え、図1のA線を縫い合わせる。

針は既習のものをを用い、指ぬきの使用は自由とする。針を布に刺し、縫い始めてから2分間をビデオカメラ（ソニーCCD-G5型）で撮影する。

表1. 試料諸元

試料布	諸元	組織	厚さ(mm)	密度(本/cm)	
				たて	よこ
晒しもめん		平織	0.43	20/cm	20/cm

試料糸	諸元	繊維	番手(S)
手縫い糸		綿100%	30/2

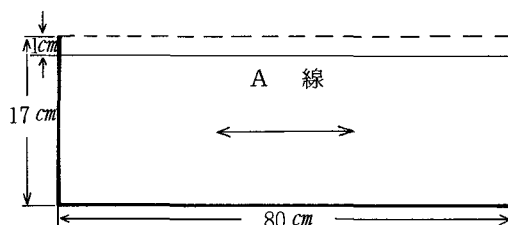


図1. 試料布の縫合線

撮影場所は被服教室南窓下の所定の位置とし、撮影は被服構成実習（和）1の授業中に実施した。

#### 4. 調査期間

昭和59年6月～7月

#### 5. 回収率、回答状況

回収率96%で回答者は94人、有効回答率は100%であった。

### Ⅲ. 調査結果と考察

#### 1. 家政科家政専攻志望状況

##### (1) 出身高校の県別・学科別割合

出身高校を県別にみると、岡山県49人、広島県42人で岡山・広島両県に集中している。次に学科別にみると図2に示すとおりである。岡山県・広島県・その他の県ともに普通科出身者が63～67%と半数以上を占めている。さらに図3は県別に学科を分類したものである。岡山県では家政科が73%で最も高く、普通科52%，商業科29%である。広島県では商業科が65%，普通科が45%，家政科27%で両県出身者の出身学科には差があることがわかる。いずれにせよ学生たちの高等学校での教育課程では、ほとんどが普通科、商業科であるから家庭科科目は「家庭一般」を履習したに過ぎないのではなかろうか。とするならば、本学家政科家政専攻者の被服学における縫製指導は、「家庭一般」の指導内容を考慮して計画することが望ましい。

##### (2) 家政科家政専攻志望の動機

受験の動機についての回答を学科別にまとめると、図4

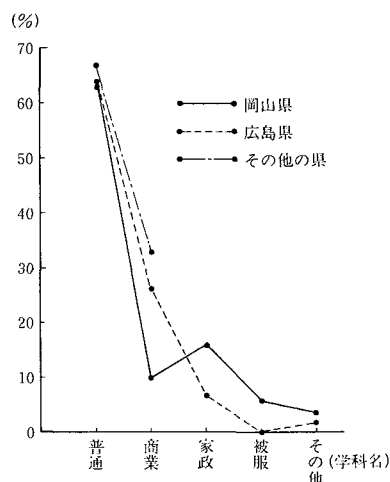


図2. 出身高校の学科別・県別学生比率

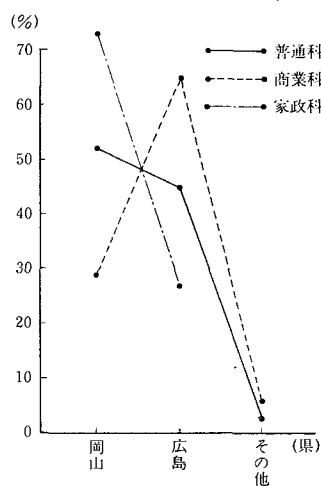


図3. 出身高校の県別・学科別学生比率

のとおりである。全般的には、

- ア. 家庭科科目を専門的に習いたい……25%
- イ. 将来の家庭生活に役立てたい……25%
- ウ. 縫うことが好き……19%
- エ. 地理的に通学が便利……12%
- オ. その他……19%

などとなっており、特にア～ウに回答した約70%の者は回答項目に差はあっても、家庭科の学習を意欲的にしようと考えていることが分る。しかし、エ、以下の家庭科学習に消極的な学生が30%もいることは見逃せない。本学大羽の「短期大学家政科学生の修学意識と不安の実態」の報告によれば、家政科食物栄養専攻生の受験動機の1位は地理的に通学便利、2位、将来の就職を考えてであった。1位はさておいて、2位の将来の就職を考えてについては、家政科家政専攻では1%と最下位である。ここに両専攻希望者の志望動機に大きな違いのあることは注目すべきことである。

### (3) 家政専攻志望の決定者

図5は家政専攻志望の決定者を調査したものである。全体的には親35%，自分30%，教師27%の順位になっており、いずれもほぼ30%とみなすことができる。特に高等学校の学科別でみると、家政科、被服科出身学生の人数は少ないが、自分自身で決定した割合が高い。これは家庭科科目の内容に対する理解度が高いものと考えられる。

## 2. 被服の既習教材とその利用状況

### (1) 小学校既習教材

小学校既習教材については、学習後の経過年数が長いと、いささか信ぴょう性に乏しいと思ったが図6の作成を試みた。袋、枕カバーはいずれも学習者が80%に近い高率となっているのは、小学校の被服領域の教材であるためで、雑巾も同様に高率であるのはすまい領域の教材か、なみ縫い練習のための教材、あるいはミシン縫い教材がいずれかであろう。

小物はこれら3教材より少なく、23%の

回答率であるのは、回答者が第6学年当時、昭和53年告示小学校学習指導要領の発表があり、小物が新らしく第5学年教材に加えてあったことによるのであろうか、推測しかねるところである。これら

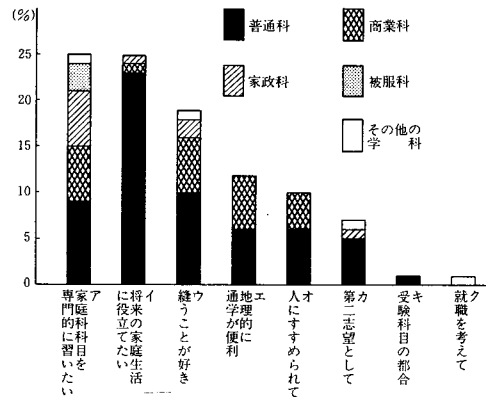


図4. 受験の動機

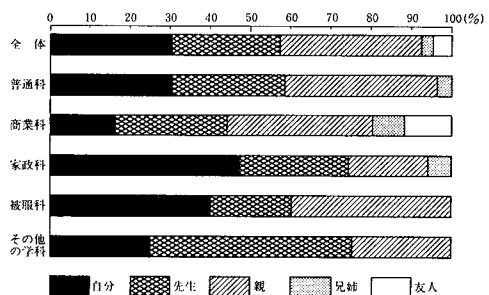


図5. 家政専攻決定者

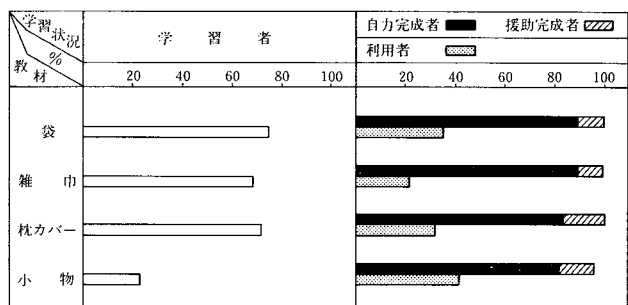


図6. 小学校既習教材

の教材作成に当っては自分で完成した者が約80%で、すでに15%前後家族の協力があつたことは注目すべきである。利用状況は約20～40%で半数にも及ばないのは使えないものができたのであろうか。

## （2）中学校既習教材

中学校の既習教材として挙げられているのは、（図7）パジャマ、スカート、作業衣（エプロン）がいずれも63～93%で、ワンピースドレス、ブラウスが28～31%となっている。このように5種類回答

しているが、パジャマ、スカート、作業衣が他の2点の約2倍から3倍の高率となっているのは、(1)小学校既習教材で既に述べたと同じ理由、即ち昭和52年告示中学校学習指導要領の発表に伴う移行措置によるものである。昭和44年告示中学校学習指導要領によれば、技術・家庭科の教材は第1学年がブラウス、スカート、第2学年がパジャマ、第3学年がワンピースドレスであった。ところが、昭

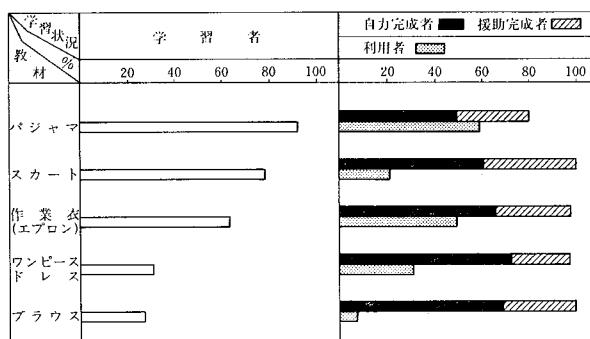


図7. 中学校既習教材

和52年告示中学校学習指導要領では、第1学年作業衣（スモック）、第2学年日常着（スカート）、第3学年休養着（パジャマ）に改訂された。そのため回答者が中学校在学中は移行期間に該当していたため、昭和44年告示中学校学習指導要領に示されていた旧教材を学習していた者が、約30%いたのである。新しい教材の作業衣はスモックであるが、エプロンと回答しているのは、改訂された新教材を扱った文部省検定済教科書は昭和55年4月1日発行であったため、当時は教科書なしの学習であり、技術・家庭科担当教師に作業衣の内容が不徹底であったものと思われる。完成状況をみると何等かのカタチで30～40%の者が完成のための援助を受けている。その理由については問うていないので推測にしか過ぎないが、受験勉強による時間不足であろうか。これら教材の利用状況をみるとパジャマが最も多く60%を占めている。パジャマの利用率が他教材より高いことは西村らの調査報告にもみられるが、その理由として考えられることは、これが寝衣であるためでさえを他人に見られないこと、ゆとりがあるので成長による体型変化があまり影響しないことなどであろう。この教材は特に小学校教材より利用度が高い。

## （3）高等学校既習教材

家政専攻では普通科・商業科出身者が大半を占め、両科とも「家庭一般」のみを履習するところが多く被服教材としては、図8のようにスカートの製作が70%以上を占めている。その他の女兒服、ブラウス、ワンピースドレス、ジャケット、ベスト、スーツ、和服教材は家政科出身者の教材であろう。パジャマとエプロンが僅かながらあるのはなぜであろうか。中学校の教材と混同したものかと思う。自分で完成したものが意外に多く、スカートでさえも74%の者が他の援助を受けずに完成しているようである。高等学校も中学校同様に受験体制下にあるため、中学校に類似の傾向にあるものと予想していたが、普通科以外の出身者が約36%いるためこのような結果となったのであろうか。念のため普通科出身者のみの状況を抽出してみると、スカートを製作した者40人のうち73%の者が他の援助なしで完成している。したがって全体で74%の者が自分で完成しているということは、学科別にみてもほぼ同程度に自力で完成していることが分った。次に作品の利用状況については、スカートが64

％，ブラウス68％，ワンピースドレス67％，ジャケット85％，スーツ100％である。和服教材の利用率は、女物ひとえ長着64％，男物ひとえ長着，羽織はそれぞれ30％前後の利用率であることは予想外であった。高等学校教材のうち和服と女児服を除いてその他の教材は、自分たちの現在の衣生活をよりよくするために製作したものであるが、この程度の利用状況をどう評価すればよいのであろうか。小学校、中学校の教材は年齢が低く衣生活に対する自覚も乏しいが、高等学校年代ではかなり衣服に対する要求も高まり、衣生活への主体性も生じてきている年齢である。したがって利用状況を数的にとらえるのみでなく、教材が各自の衣生活に及ぼした影響などの内面調査も試みるべきであったと反省している。

### 3. 手縫いとミシン縫いに対する学生の好み

手縫いとミシン縫いの好みの実態は図9で示したとおりである。まずミシン縫いについてみると、好きな者は70％を超え、わからない者25％，きらいな者3％でほとんどの者がミシン縫いを好んでいるといっても過言ではあるまい。一方、手縫いについては、好きな者40％，分らない者47％で、好きな者が以外に低率であった。きらいな者は18％もあって、ミシン縫いに比べると好かれていないことが分る。これは中学校、高等学校における被服製作教材がいずれもミシン縫いであるため、ミシン縫いになりに慣れてきていることが好きな者を多くした原因になっていると思われる。手縫いによる教材は小学校第5学年の「袋作り」<sup>5)</sup>のみであるため小・中・高等学校をとおして学生の手縫い経験はきわめて少ない。その結果、高等学校卒業まで手縫いはわからないものとして続いてきているものであろう。

手縫いとミシン縫いのいずれを好むかについての調査には、西村らの「岡山県の小学校における被服製作指導」(第2報)<sup>6)</sup>

がある。この調査は岡山県内、県北部の小学校児童を対象にしたものであるが、小学校段階で既に手縫いよりミシン縫いを好きとしており、この傾向がそのまま中学校、高等学校の家庭科の学習に続いているのであろう。その理由は、手縫いによる製作教材は小学校第5学年の「小ものの製作」と「袋作り」のみで、第6学年の教材からすべてミシン縫いである。そのため小学校で手縫いによる縫いの指導はほとんどなされていないといえる。このことについては、岡山大学教育学部附属中学校第1学年女子生徒の入学当時の実態を調査した西村らの報告から十分推測することができる。<sup>7)</sup>中学校の「技術・家庭」、高等学校の「家庭一般」における被服製作教材もいうまでもなくミシン縫いによる

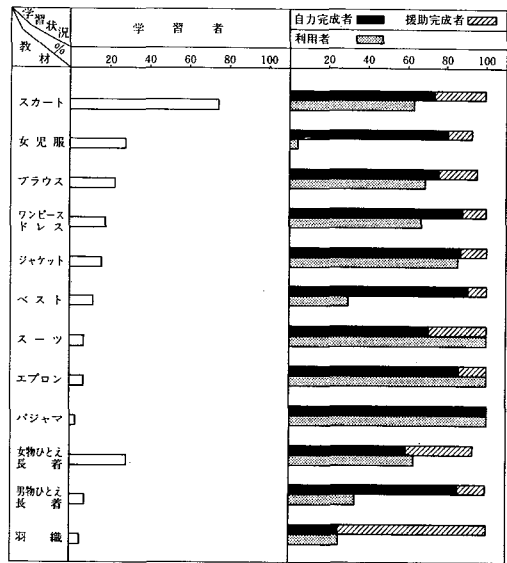


図8. 高等学校既習教材

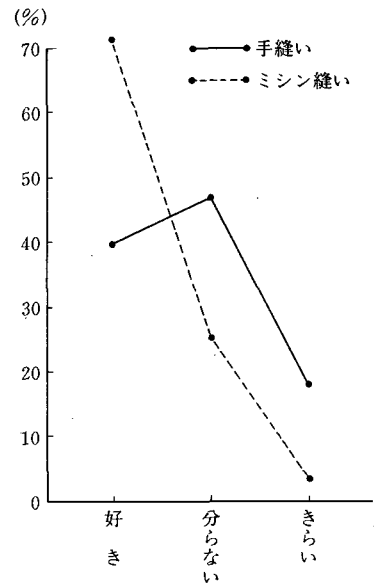


図9. 縫いの好き・きらい

製作であることから、手縫いを好む者がミシン縫いを好む者の約半数にしか及ばず、しかも、好きかきらいかも分らない者が、ミシン縫いの場合の2倍に近い高率を占めるという結果になったものと推測される。

#### 4. 「なみ縫い」技能の習得状況と理解度

##### (1) なみ縫い技能の習得時期

なみ縫いを学習するのは小学校第5学年であるが、本学家政専攻第1学年生のなみ縫い技能を習得したと思っている時期の実態は表2である。小学校第5学年で習得できたと思っている者40.4%，第6学年12.8%，中学校第1学年から第3学年までは各年ごとに数人の者が習得したと答えている。中学校第3学年までに習得できたと答えた者は大体75%である。約20%の者は高等学校以後の習得であり、未習得の者が約5%いることは意外であった。

##### (2) なみ縫い学習の習熟度

なみ縫い技能の習得時期の調査表2で、その技能が習得できたと思っている時期にかなりの差があることが分ったので、その習熟度について調べた結果、小学校第5学年、第6

	学年	人数	学年別 人数	%
小 学 校	5	50	38	40.4
	6		12	12.8
中 学 校	1	20	7	7.4
	2		8	8.5
	3		5	5.3
高等学校	1	18	9	9.6
	2		1	1.1
	3		8	8.5
未 習 得		6		6.4
合 計		94		100

表2. なみ縫い技能の習得時期

学年で習得したと答えた者50人のうち、ア、自由に縫えるようになっていていると思う者約2%，イ、かなり自由に縫えると思っている者92%，残り約5%の者は、ウ、余り縫えないと答えている。（以下ア～ウの記号で示す）。中学校で習得したと答えた者、第1学年から第3学年までの20人では、イ、と答えた者55%，ウ、と答えた者45%，ア、と答えた者は全くなく、半数近い者が余り縫えないと答えた。高等学校で習得したと答えた者18人のうち、ア、11%，イ、17%，ウ、72%であり、ア、と答えた者は家政科、被服科の出身者である。このことからなみ縫いの習得時期は、低学年の方が習熟度が高いのではないかということである。この習熟時期と習熟度の関係については、既に松岡らは被服学習の初期に十分習得させる必要があると報告していることもうなずける。

##### (3) なみ縫い技能の理解度

小・中・高等学校を通じて被服教材はミシン縫いが多く、手縫いによる教材が極めて少ないことは前述したが、手縫いの中でも「なみ縫い」は縫製技術の基礎であるにもかかわらず、その技能はややもすると取り残されがちになる。そこで「なみ縫い」技能がどの程度理解できているかを知るために①～④の調査をした。

- ① 縫い易い針は長針ですか短針ですか。
- ② 縫い易い手の間隔はどの位ですか。
- ③ 上手に縫うために左右の手はどのように動かしますか。
- ④ 晒しもめんの「なみ縫い」の縫い目はどの位にしますか。

その結果

①縫い易い針は長針62.8%，短針26.6%，どちらでもよい9.5%であり、長針使用者が半数以上占めている。しかし、家政科出身者は全員短針を使用しており、これは今までの習慣からくるものであるか、家政科における教師の指導によるものであろうか、未調査のため不明である。

②縫い易い手の間隔は5 cm位と答えた者44％、10 cm位 26％、間隔なしで縫いすすむ 19％、15 cm位 12％であり、5 cm位の間隔が縫い易いと答えた者が最も多い。これは針の長短、姿勢にも関係すると考えられる。

③上手に縫うため左右の手の動きについては、左右平等に動かすと答えた者35％、意識していない31％、右手のみ動かす27％、左手のみ運かす7％である。意識していない、右手のみ、左手のみの者を合せて65％の者が不完全な動かし方をしていることは、今後の指導を痛感する。

④晒しもめんを「なみ縫い」する場合の縫い目の長さは2 mmと答えた者21.3％、3 mmが50％、4 mmが22.3％、5 mmが53％、6 mmが1.1％であった。小学校第5学年の学習では4 mmと指導しているようである。そこで、4 mm±1 mmの縫い目の大きさについては理解しているものとみなすことができる。

##### 5. 「なみ縫い」技能の学生評価と教師評価

なみ縫い技能の習得状況を評価するため、10図の5項目（布の持ち方・針の持ち方・姿勢・手の動かし方・縫い目）について、学生には自己評価させ、教師は3の調査方法の(2)により撮影したビデオテープの録画を再生して評価した。評価の基準は、学生・教師共に西村らの研究報告に掲載の基準<sup>9)</sup>を使用した。学生と教師の評価結果を比較すると図10のとおりで以下のことがいえる。

- ・教師評価は、縫い目のみ「大体よい」に評価が集中し、その他は「悪い」に集中している。
- ・学生は、手の動かし方のみ「悪い」に集中して、その他は「大体よい」に集中している。
- ・教師と学生の評価との関係は、教師評価は「悪い」に集中している項目が多く、学生評価は「大体よい」に集中している項目が多いが、特に「姿勢」についてはその差が大きい。
- ・全般については教師評価が、学生の自己評価より厳しいことが分る。

このことから今後のなみ縫い指導では、布の持ち方、針の持ち方、姿勢、手の動かし方について特に留意する必要がある。

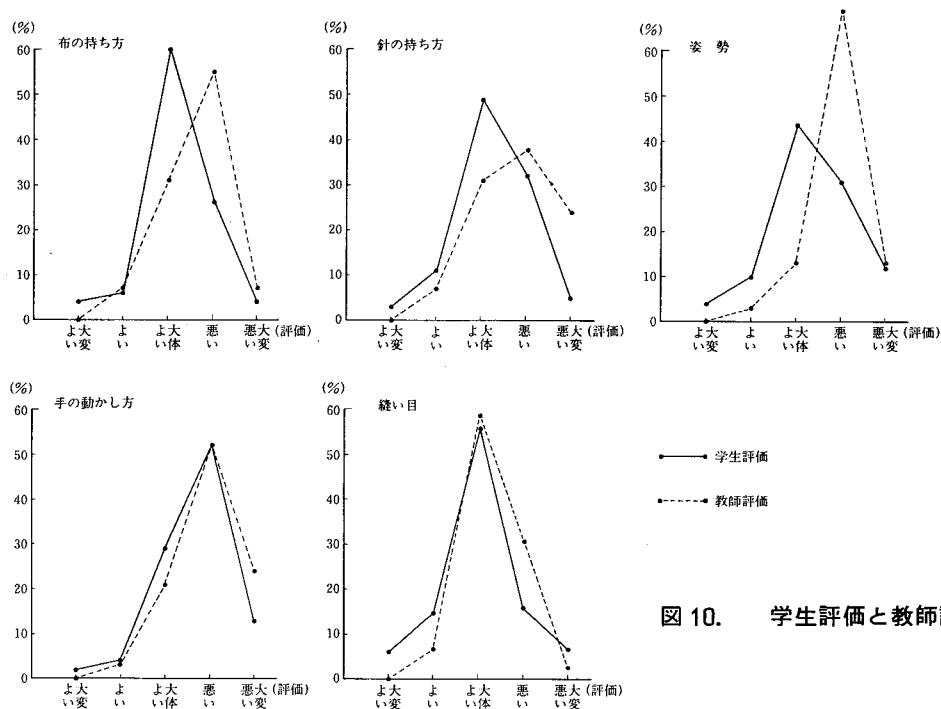


図 10. 学生評価と教師評価

#### Ⅳ ま と め

以上の調査の結果、当学科2か年間の在学中、被服構成実習（和裁）指導において留意しなければならない幾つかの点が明らかになったので要約しよう。

1. 家政専攻入学者は出身学科の関係で、大部分の者が「家庭一般」の学習のみで終わっている。したがって、これに続く教育内容を計画するのがよいが、学生の大半は家庭科の学習に意欲をもっているようであるから、今後の指導に期待がもてる。
2. 被服製作に関する既習教材をみると、自分で完成したと思っている者は小・中・高等学校を通じて、過半数以上であるが、しかし、中学校では時間不足のためのしわ寄せが完成率を更に低くしている。利用度についても小・中・高等学校共に高い率ではない。今後の指導では自己完成率、利用率の高いことを目ざし、学生の衣生活に役立つ物の作成を目標としたい。
3. 手縫いとミシン縫いについては、既習教材の関係で手縫いは好まれていないことが判明した。本専攻では和裁教材が2か年間続いたため、手縫いの有用性も理解し、これまでにみられなかった「なみ縫い」への自信が学生たちに与えられるよう指導上の配慮をしたい。
4. 「なみ縫い」の習得状況はきわめて悪いので、今後の指導法の改善・工夫によって、その向上を図りたい。

本調査は家政専攻入学生に対して実施した初回の調査であったが、日頃の和裁指導に注目すべき若干の問題をとらえることができた。今回の調査の反省に立って、引き続き次年度も調査を重ね、学生の実態に則した和裁指導のあり方を研究したいと思う。

最後に、この調査を行うにあたって御指導いただきました岡山大学西村綏子教授に深く感謝いたします。

#### 参 考 文 献 等

- 1) 松本 健 現代日本の家族像 生命保険文化センター教育資料（1984）№39 P10
- 2) 松本 健 現代日本の家族像 生命保険文化センター教育資料（1984）№39 P11
- 3) 大羽和子 短期大学家政科学生の修学意識と不安の実態 中国短期大学紀要第15号（1984） P29
- 4) 西村綏子、福田逸子 中学校技術・家庭における被服教育の実態 日本家庭科教育学会誌第14号（1973）P51
- 5) 文部省 小学校指導書、家庭編（1978）東京書籍株式会社発行 P29
- 6) 西村綏子、利岡千代子 岡山県の小学校における被服製作指導（第2報）岡山大学教育学部研究集録第56号（1981）P215
- 7) 西村綏子、原田幸子、宇賀みどり 岡山県の小学校における被服製作指導（第6報） 中学校入学直後における女生徒の「並縫い」の実態 岡山大学教育学部研究集録第62号（1983）P34
- 8) 松岡歌子、石毛フミ子 小・中・高校における被服教育の実態と成果（第1報） 技術面を中心として 日本家庭科教育学会誌第18号（1976）P6
- 9) 西村綏子、佐藤恵子 岡山県の小学校における被服製作指導（第7報） 「並み縫い」の授業研究 岡山大学教育学部研究集録第64号（1983）P12